

第3種郵便物認可



バグウォッシュ会議

一九七五年は人類にとって運命を左右する年にあろう。すなわち核兵器が強大化して使われる可能性が、それを消すためのどっちに向かうか、そのパタンがこの年でまあるる。

京都シンポジウム事務局から三十七カ国に送られた招待状にはこう書かれている。米ソ戦略兵器制限交渉(SALT)が難航、中東など未解決の紛争がつねに核戦争につながる危険をはらんでいる。いま、このシンポジウムは大きな転機に立っている。

戦後三十年。被爆国ではじめて開かれるシンポジウムが核軍縮への具体的な展望をさぐる重要な場となり得るか。その主題も「完全核軍縮への新しい構想」。それはまたバグウォッシュが、核兵器廃絶を自己宣言するシンポジウムを「宣言」の精神を以て行なうかが問われている。

核軍縮への道

1975.8.28 朝日夕刊
足らぬ人類忠誠心
主役・わき役交代を

核問題でこれは宣言、会議があるのに核軍縮が進まないのはなぜか

ここに根本原因がある。

核保有国はつねに核開通の理由を正当化してきた。アメリカ「ナチへの脅威から踏み切った」、ソ連「核独占はアメリカの支配を押し戻すために必要」、フランス「核の力はあてにならない」……。

長いバグウォッシュ会議での経験は、これら核保有国からの出席者がはたして自国政府に向かっ核軍縮をすすむらるか、という深い疑問である。むしろ核を持つため国が核保有国に核軍縮を迫るべき時ではないか。

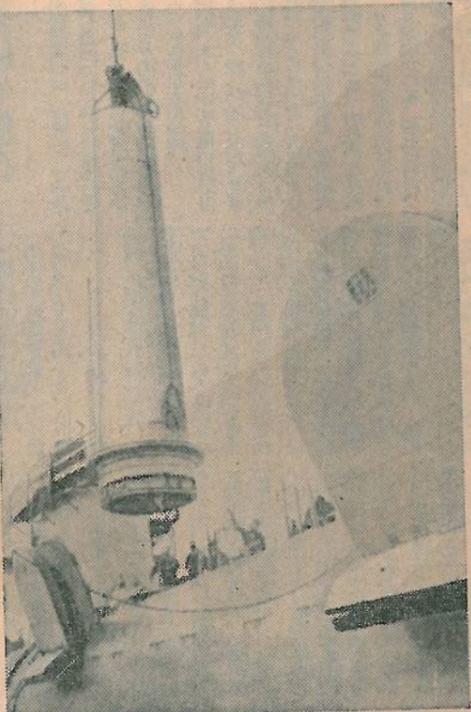
たしかに「米ソ主役、他国ワキ役」のバグウォッシュの仕組みからは、いきつきの先ほきいせい「軍備管理」まで「核軍縮」まで進めない事情にある。「だからこのへんで、全面核戦争を避ける」という基本精神を共通認識する場としての「核保有国」と「非核保有国」の会議を別々に並行して開くべきだ」と豊田教授。従来の「核の脅威」がすでにいじりださず来ているのに、これから逃れる道は、まず米ソが「核兵器を絶対に使用しない」と宣言すること。いまや「軍備管理」から「核軍縮」へ方向転換する時である。それと同時に大量の武器輸出や核拡散が心配される第三世界との関係、「南北問題」を正面からとりあなければならない。米ソが「核軍縮」へ歩を進める姿勢を示すまで、その開発途上国における核保有、軍備競争への根柢を失わせることはとうとうない。

坂本義和東大教授(国際政治)

い」と宣言すること。いまや「軍備管理」から「核軍縮」へ方向転換する時である。それと同時に大量の武器輸出や核拡散が心配される第三世界との関係、「南北問題」を正面からとりあなければならない。米ソが「核軍縮」へ歩を進める姿勢を示すまで、その開発途上国における核保有、軍備競争への根柢を失わせることはとうとうない。

坂本教授は強調する。「政府間でできないことを民間、非政府レベルで「ニューゲーション」を保ってきたところにバグウォッシュの有効性があり、これまでの米ソの直接の対話はかなり進んでいる。むしろ断絶が大きいのには「核保有国」と「非核保有国」との「ニューゲーション」であり、その対話で第一義的な意味を与えることだ。

「その際、わが国が非核保有国の中心になって核全面禁止を呼びかけ、第三世界の国々をひっぱっていくべきだ」と日本学術会議の三平泰雄氏が主張する。すでに、この京都シンポジウムはその意味では新しい実験の場であり、その責務もきわめて重いといえる。



原潜ジェームズ・マシソン号に積み込まれるボセイドン・ミサイル(A5)。核の脅威が高まるなかで、今回のシンポジウムは「軍備管理」から「核軍縮」へ向かう精神がうめられる。

（おわり）

c092-17-028